J. デューイの教育理論の方法と基礎概念
（その II）

杉津 俊夫

第四章 教育的諸問題の哲学的批判（その 2）—成長または経験の改造の意味について

第四章 教育的諸問題の哲学的批判（その 2）
—成長または経験の改造の意味について—

I

われわれは「J. デューイの教育理論の方法と基礎概念（その 1）」の「第三章 教育的諸問題の哲学的批判（その 1）—教育的に問題となるものの一般的特性について—」の末尾において、この章で展開された考察を、次のようにまとめた。即ち、教育とは、最も一般的には、共同体または共同生活の一般的・根本的な生活並びに行為の様式——精神的性向——を前提として、物質的諸条件を共同的に行使することによって、「相互の性向を修正し合う」過程である、と。これまでの考察のこのような中間的な概括を更に発展させるためには、ここで、性向の修正ということが如何なる意味内容を含んでいるか、その具体的な内容が明らかにされなければならない。性向 disposition とは、この場合行為の習慣（的傾向）、習慣的な行為の組織または機構という程の意味を持ち、同じことを、デューイは、別に、「成長」growth とか、「経験の改造」reorganization of experience——これが、彼の教育の定義となるものであるが——と、言い表わしている。ここに、経験とは、行為または経験する過程とその結果を併せて含むものであり、成長とは、他でもない行為における成長である。いずれにしても、問題にされているのは、行為の——仕方と結果における——修正または改造であるが、そのことの意味を具体的に問うことは、(1) 人間、精神的存在の行為の一般的特徴を明らかにすること、および(2) そうした一般的特徴の認識を踏まえて、その行為の——仕方と結果における——変化、更には、望ましい変化という意味において、修正と改造または成長が具体的にどんなことを意味するのかを示すこと、を要求することである。そして、そのことは、また、以下の考察の展開の

（1）「東北大学教育学部研究年報 第 25 集」 p.39
（2）J. Dewey, Democracy and Education, 1916, p.48
（3）ibid., p.41, 76
途上で示される如く、意味の理論の一定の理解を前提することになる。

II

デューアイは、存在界を、その活動 activity の様式における差異に従って、「物的（なものを）」または「物理—化学的（なものを）」physical, physico-chemical と「心的（なものを）」psycho-physical と「精神的（なものを）」または「身体—精神」mental, body-mind の三つに分類する。日常的な表現に従えば、無生物、生物、人間 inanimate thing, animate being, human being が、それらのそれぞれに当る。また、「物質、生命、および精神」matter, life and mind は、それら三つのものの活動の「特徴」character を、それぞれ端的に言い表す言葉である。デューアイは、それら三つのものを、相互に「種類の異った存在」separate kind of being とは、考えない。それらは、ともに、根本において、同一の「自然的諸事象」、同一の「物理—化学的エネルギー」の相互作用から成るものであって、相互に連続した同一の自然的実存である。例えば、心的—物的なものが物理—化学的なものと異なった性質を持つのは、それが、物理—化学的エネルギーに加えて、更に、それに対して外的で超自然的なもの、「生命または霊魂と呼ばれる特殊な力または実体を」を含むようになるからではない。だがしかし、それだからといって、デューアイは、それら三つのものの間の差異が、唯一の同一の（活動の）原理によって説明しうるものであるとは考えない。そうした還元論、つまり「唯物論」または「機械論的形而上学」を、彼は否定する。質的差異または新しい性質の出現に際して、人が理論的に為しようことは、二つある。即ち、(1) 新しい性質が、以前の古い如何なる性質の変化してきたものか、しかもそれが如何なる新しい性質を附加しているか、その連続と差異を明らかにすることは、および(2) 新しい性質の出現は具体的に如何なる条件の下で生起したかを明らかにすることが、の二つである。問題となっている三つのものの間の質的な差異は、それ故、物理—化学的な諸々のエネルギーが「相互に連絡し作用するその仕方」における差異、その「相互作用の増大していく複雑さと密接さの水準または段階 level の差異」を表わすもの、と考えられるべきである。そして、この様な考察の立場をとるならば、存在の三つの水準・段階の間の差異の説明は、最早単なる思弁の問題ではなくて、「明確な事実に基づく探究の問題」となる。質的に異なる新しい水準・段階は、「厳密に如何なる条件の下で生起するか」、また「その

(4) J. Dewey, Experience and Nature, 1926, p. 261, 254, 284
(5) ibid., p. 261, 265
(6) ibid., p. 261
(7) ibid., p. 261, 254
(8) ibid., p. 256
(9) ibid., p. 262
(10) ibid., p. 254, 261
(11) ibid., p. 255
生起は如何なる多様な様式をとり、如何なる多様な結果をもたらすかというような問題は、ただ経験的な専門諸科学の研究によってのみ定められる問題である。この種の問題は、今日まだ多くの点で未解決のまま残されているが、しかしその解決は、ただ専門諸科学の研究の進展によってのみ得られるべきものなのです。

さて、精神的存在、人間に特徴的行為の新しい仕方または活動力の新しい構造が、具体的に如何なる条件の下で生起したのかを、科学的に述べることは、まだできない。今われわれに出来ることは、人間の行為が、最も一般的根拠に見て、一体如何なる特徴・特性を持つかということ、間も、心の一物的な存在の活動、つまり生物、就中「移動器管」と「遠方探知器官」

*loc
c
c

omotor organs and distance-receptorsを具えた高度に発達した動物*という活動の仕方と比較して、根本的に如何なる点で、どのように異なるのかを明らかにすること、である。

心の一物的な存在の活動を特徴づけるものは、個々の活動が、それに個有の活動の仕方、つまり「それ自身を維持するように」「他ならぬ一定の結果のために」——単に選択的にではなくて——「識別的に」*discriminatory* 為されることである*.*生物の活動を特徴づけるこの性質が、「感性」または「感受性」*sensitivity or susceptibility* であるが、それは、移動器官と遠方探知器官を具えた複雑な動物において、「感情」*feeling* の形をとる現われる。空間的に遠方のもの、時間的には未来のものに対する反応の必要は、動物の活動を、「準備的、予期的なもの」と「完成的なもの」「the preparatory or anticipatory and the fulfilling or consummatory*」へと分化せめるが、この段階においては、有機体の感受性は、この分化した一連の活動を覆い包む「一定の特殊な緊張」*a peculiar tension* という形をとることになる。そして、具体的な活動の仕方に応じてそれぞれ個有の性質を帯びたこの心的緊張は、最早感情や呼ぶより他ならないものだからである。この緊張の中で、一連の活動の準備的成分を含める反応は、活動の諸結果——その生起に準備的反応が寄与するのだけ——具わる「完成的な調子」*consummatory tone* を予め帯びるようになり、同様に活動の完成成分は、それに至るまでの準備的反応に具わっていた調子を累積的に統合し、保存するものとなる。生殖、食物、安全へとつながる活動の準備的反応は、それぞれ相互に異った緊張を伴うであろうし、また活動の成就が伴う満足は、そこに至るまでの活動の過程の難易、持続の長短、周囲の状況によって、それぞれ異った性質を帯びることになる。活動は、感覚器官、即ち外部感覚受入装置と自己刺激

(12) ibid., p. 255
(13) ibid., p. 256, 257
(14) ibid., p. 256
(15) ibid., p. 256
(16) ibid., pp. 256～257
(17) ibid., p. 257
(18) ibid., p. 257
(19) ibid., p. 257
感覚装置 extero-ceptors and proprio-ceptors の分化に伴う環境の多様なエネルギーへの敏感な識別的反応の増大、および移動器官の発達——それはまた内分泌器官の発達と密接に結びついている——に伴う運動の範囲と精巧度の増大とともに、複雑化し、多様化するが、そうした活動の帯びる心の緊張つまり感情もまた、活動の種類と同一の活動内部に分化していく局面に応じて、その質と強度を異にし、一層多様化する(22)。感情は、かくして、多様な区別を「受け容れ、含む」receiving and bearing もの(21)となる。

一方、このように発達した感情を具えた、複雑で敏活な動物を、精神的存在、人間に対して特徴づけるもの、それは、「それらが自ら諸々の感情を持っているということを知らない」(22)ことである。それらは、事実上多様な感情を持ち、感情がそれぞれ含んでいるところの多様な区別を示すほど巧みに活用し、その区別に助けられ活動している。しかし、それらは、自らがさきにそのような仕方で感情を抱き、それに導かれて活動していることに気づかない。感情は常に活動と密着して現われる且つ消える。感情はまだ活動から独立していまず、それとは別個の独自の過程を持つに至っていない。それは、全面的に直接に活動に連結し、活動に生来具わっているところのそれぞれ個体の特殊な組織——いわゆる本能 instinct ——に組み込まれてしまっている。活動の流れの中断とその挫折こそ感情を活動の過程から分化・独立させる契機となるものであると考えられるが、活動の本能的組織の驚くべき効率と確実さはそれを許さない。動物がひたすら活動に没頭し、その活動に伴なう感情を——従ってまたそうした活動に自ら従事しているということそれ自体を——知覚するに至らないのは、まさにこのような事情によるものである、と考えられる。

Ⅲ

心の一物的存在、特に動物の活動に対して、存在の新しい発展段階たる精神的存在の行為を最も一般的根拠的に特徴づけるものは、その知的ないし精神的な構造である。精神的・知的性格を持つ行為とは、「意味を所有し意味に反応し(22)」て為されるような行為である。意味 meaning とは、事物の知覚された可能的諸関係である。事物はすべて、個体の性質を帯びるとともに、他の事物との間に多様な諸関係——更に具象化して言えば、その事物の出現の諸条件とそれが遡及する諸結果——を持つが、この諸関係を知覚・理解し、そうした諸関係を表示するものとして人がその事物を取り扱う時、彼はその事物に——動物がする如く——直接に反応するのではなく、その意味に反応することになる。事物を取り扱う彼の行為は、その時精神的または知的なものとなる。

(20) ibid., pp. 257—258
(21) ibid., p. 257
(22) ibid., p. 258
ところで、行為が精神的なものであるということ、それが事象の意味に反応するという仕方で為されるということが含まれる具体的な意味内容——それはまた動物の本能的な活動との具体的な差異の表示を意味するが——は、極めて多大である。しかし、その多様な内容を、われわれは、差し当り、精神的生存の個体の活動力が帯びる新しい性格とそれら個体の間の相互作用が帯びるに至る新しい性格とに分けて、より具体的な仕方で考察することができる。個体の活動力の習慣的な組織と個体間の相互作用の共同的行為という形式が、それである。この両者は、既に述べた通り、精神的・知的行為という一般的の事件の表裏二面を成すものであって、互に他を前提し、依存し合う関係にある。精神的生存、人の最も一般的な特性・特徴、即ちその行為が精神的・知的な性格を帯びるということは、この二つの面の統合としてのみ、より一層具体的な仕方で解釈され、理解されうるものとなる。それ故、以下の考察は、次の三段階の手順を踏んで為されることになる——即ち、第一に、精神的生存における習慣的な行為を、心的一物的存在における本能的活動と比較することによって、特徴づけること、第二に、精神的生存諸個体の間の共同的行為の構造をその条件として生起する言語や意味の機能を考察すること、第三に、以上二つの考察を統合しつつ、精神的・知的行為の特徴を改めてより具体的な仕方で明らかにすること、である。

その環境に対して「常に明確に組織化され適合されている」(24) 動物の本能的活動に対して、精神的生存の活動をまず最初に特徴づけるものは、その個体の活動力の出発点つまり誕生時における全ての「未熟さ」(25) immaturity であり、その生来の活動力が、動物の原始的能力が具えているような「複雑な既成の組織を欠いている」lack the complex readymade organization こと(26) である。それは生来の組織を欠いているため、全く盲目的で、それ自体の内部で諸要素が「相互に衝突し合い」(27)、顕在的な行為の形をとって顕現することができない。まさにこのような未熟で未組織的な活動力こそ、精神的生存諸個体の行為の習慣的な組織のみならず、個体間の共同的行為とその体系を社会のいわば実体の基礎、その素材を成すものなのである。

精神的生存の個々の活動力の最初のこの未熟さは、しかし二つの面から更に具体的にとらえ返すことができる。即ち、未熟さ、既成の組織のほぼ完全な欠如は、一方において、組織化されることの必要性を、従ってまたそうした個々の活動力にとって外的既成の行為の組織への「依存性」dependence——それはまた、習慣的に組織化された共同的行為とその体系を共同社会を前提する——を意味するが、他方において、それは、そうした行為の習慣（的組織）を習得する能力、高度に柔軟な「可塑性」plasticity を意味する(28)。

(23) ibid., p. 272
(25) J. Dewey, Democracy and Education, p. 41
(26) Human Nature and Conduct, p. 102
(27) ibid., p. 99
精神的存在の個体の活動力が全くの未組織・未熟を以って始まるということは、それ自体の中に既に他の習慣的に組織された活動力の存在およびそれとの不全の密接な結合を前提として含んでいる。未熟・未組織は、この点で依存性を意味するが、この依存性は、更に次の二つのことをその具体的な意味内容として含んでいる。即ち第一に、それは、他の人々への依存、生活の全面に及ぶ保護と指導を受けることを必要とする、ということである。これは自明のことである。しかしそれは、第二に、そうした依存を、未熟なる者、幼児の側から可能にする又は可能とする積極的な能力を含んでいるものであると考えられる。この積極的な側面を含むものであれば、依存は唯独なる依存、というよりは寄生となる。「個々の人々の様々な態度や行為に共感を以って共鳴する子供たちの柔軟で敏感な能力」——大人はそれを余計なものとして既に失ってしまって、「相互依存」の関係にはとんどの関心を持っていないうち、そうしたいわば依存の能力を、具体的でかつ端的に示すものである(29)。子供における「物質的事物を制御する能力の欠如」は、こうした「社会的敏観さ」social responsiveness つまり「人の行為に対する注意の強化」によって補われているのである。幼児の依存性は「弱さでなくて、力である」(30)。

ところで、人間の活動力は、既往の組織の欠陥を以って始まるが、しかしこれは、いわゆる「衝動」impulse、つまり「原初的で、しばしば放縄な、方向づけられない、端緒的なもの」(31)にとどまるものではない。人がすべて日々の経験の奥底で潜ぎなく確信している如く、可塑性を具えたもの、組織化されうるもの、組織を習得し自らを行為の組織へと形成しうるものである。しかし、精神的存在の未組織な活動力に対して唯独にその可塑性を一般的に指摘しただけでは、まだその決定的な特徴を把握したことにはならない。その真の特徴は、その可塑性の具体的な現われ方、その組織習得の過程が示す個々の性質としてとらえることができる。そして、その組織習得の過程の特徴として、次の四つを挙げることができる。即ち、人間が個にあるその活動力の高度な可塑性は、第一に、組織の受容または習得の際に関示するところの非常な敏感さ、繊細さ、すばやさにおいて、第二に、その組織化の方向の無制約性において——それは「その環境との相互作用に従って如何なる性向にも組織化されうる」(32)——、第三に、組織の習得における体系性・組織性において——人は「学ぶことを学ぶ」、つまり「学習の習慣を習得する」(33)——、最後に、組織の習得の際にそれが示すところの「独創性」originalityにおいて——それは単に「可塑性」「従順さ」malleability and docility として現われるばかりでなく、

「探求・発見・創造」に向けた動く(34)——その特徴を示す。精神的存在の個々の活動力のそ

(29) Democracy and education, p. 43, 44
(30) ibid., p. 43, 44
(31) Human Nature and Conduct, p. 90
(32) ibid., p. 91
(33) Democracy and Education, p. 45
(34) Human Nature and Conduct, p. 93, 101
の端緒における可塑性は、まさにこのような具体的な性質を併せ有するものとして、理解されなければならない。

精神的存在の活動力の当初の未熟・未組織は、以下の考察に見られたような個有の性格を帯びた依存性と可塑性との統合として把握される時、それが「単なる欠陥」を意味するものでは決してないことが、明らかになる。それは、周囲の人々との結合を要求し、それを獲得する能力である。それは、「積極的な力または能力、即ち成長する力」（35）である。幼児は、いわば「社交の第一級的能力」equipment of the first order for social intercourse（36）を具えているのである。

さて、以上のような精神的存在の生来の活動の未熟さに関する考察を踏まえて、習慣的行為の——本能的活動に対する——特徴の考察に入る。精神的存在、人間において、行為の組織とは、習慣である。活動力の組織とは、習慣の習得、習慣化を意味する。習慣化されることによってのみ、活動力は、観在的な行為へと解放され、現実化される。しかし、ここで注意されねばならないのは、活動力の習慣化ということの意味である。習慣が行為の仕方、より正確に言えば「環境を使用し合体する仕方」 ways of using and incorporating the environment（37）であるということは、一般に認められていることであるが、それは習慣の一側面であって、その全てではない。「意志」または「自我」というようなものが既に存在していて、それが素材としての活動力に、行為の単に客観的な形式である習慣を結合し、それによって習慣的行為が可能になる、という観念は、現実は成り立たない。習慣は、単に「箱の中の道具の如く意識的次第によって使用されるのを待っている手段」、単なる「技術的能力」（38）ではない。習慣は、組織された活动力であって、意志なし自我をその中に既に含んでいる。それは「投射・推進の力」 projectile power を持ち、「一定種類の活動を要求し」、人を直接に動かす（39）。一定の習慣を習得することとは、意志または自我が変わるということを意味する。習得された多様な習慣は、人の内部にあって、絶えず観在的行為となって現実化することを要求し、相互に浸透し合って機能している。個々の行為は、単一の一定の習慣の観在化であるというよりは、むしろ、こうした「習慣の相互浸透」interpenetrate of habits（40）の全体系の一定の仕方での顕われを見るべきである。そして、この相互浸透によって形成される「習慣の相互作用の全体」こそ、性格つまり意志ないし自我である（41）。習慣の観念から、このような「投射的、動的な」projective, dynamic（42）側面が見落とさ

(35) Democracy and Education, p. 42
(36) ibid., p. 43
(37) Human Nature and Conduct, p. 18
(38) ibid., p. 26, 25
(39) ibid., p. 26
(40) ibid., p. 37
(41) ibid., p. 38
(42) ibid., p. 39
れてはならない。習慣、活動力の習慣的組織は、かくして、自ら活動するものであり、活動の仕方ないし方向を与えるものであり、更にはそうした活動のエネルギーそのものでもある。

ところで、生得的本能の機構に対して、このような習慣の組織を特徴づけるものは、何よりもまず、それが形成され、習得されるものだということである。（それが）形成・習得されるもののであるということは、より具体的には、次のことを意味する。即ち、（1）その形成が長期の過程にわたり、序々に、ただ部分的な組織の習得の累積としてのみ行われること。（2）従って、それは、活動力の完全な、即ち全面的で完璧な組織とは決してなり得ないものであること、（2）それ故にまた、それは、常に修正の可能性を有し、絶えず再形成されていくものであることに、至る。

習慣の形成と再形成が、人の生涯において得られるものであることは、そのための特別な考察をまたまでもなく、明らかに事実である。そして、それはそれぞれ具体的な環境との相互作用を通じて、その場その場で、ただ序々に、部分的にのみ進行する。また、具体的な現実の相互作用は、常に、個性的であって、事前の予測を、従ってまた意図や計画を越える。その結果としての習慣の形成と再形成は、常に個性のものであり、常に偶然的である。そして、その性格、とりもなおさず、活動力を完全に閉じ込めよう、活動力に完全に合致した。本能にも比すべき習慣的組織の意識的・調和的形成の不可能性を明らかにする。不完全で、その内部に立った傾向を孕む習慣的組織の体系——性格——は、有効な現実の行為にとって顕在化することを絶えず求める活動力の要求を、直ちに、全面的に充足し切ることは、決して出来ない。未組織の活動力の「貯蔵量」と、組織化されて顕在的行為の形をとる「費消される量」との間に常に存在する「ずれ」(43) が、かくして人間の活動力を特徴づける。いわゆる人間における慢性的な衝動の過剰である。しかし、この慢性的な活動力の過剰は、逆に現実の直面的・顕在的行為から分離した内的な活動力を与えることになる。そして、これこそ、人間における豊かな内在世界とそれを彩る感情の素材となるものである。十分な調和に達してもいな、また活動力を残るくまなく包摂し切っていえない習慣的組織は、諸々の機会に、自ら解釈を来たし、また未組織の活動力の喚出によって、或是はその断きの圧迫を受けて、破綻せしめられる。既成の組織の破綻は、その再組織化へとつながる。

字義どおりの全く陳腐なことにすぎないとは言え、それが形成されるものであるということは、本能に対する習慣の最大の特徴である。このことを踏まえて、更に習慣の習得・形成の過程へと考察を進めると、今度は、その形成の過程における習慣の「社会的」(44) 性格が注目されるものとなる。ここで注目すべきことは、以下の二点である。

第一に、前述した如く、生得の組織を欠かした人間の未熟な活動力は、自らをとりまく人々——彼ら相互の間には、一定の仕方の共同的行為とその組織つまり共同体がある——との結合

(43) ibid., p. 139
(44) ibid., p. 19
を、その未熟であることそれ自体の中に、既に前提している。第二に、未熟な活動力は、ただこうした周囲の人々の共同行為に参加することを通じてののみ、行為の組織を習得し、習慣化し、かくして顕在的行為となって実現される。勿論、行為の組織を（未だ）持たない未熟な活動力の共同行為への参加ということは、それ自体一つの論理的背理であるか、その背理の解明は、ただ何人もが経験するそうした参加の現実の過程の記述によるより他はない。

共同行為への参加は、個々人の誕生とともに始まる。幼児の最初の活動・動作は、共同的習慣的であるというよりは、無秩序・無関心で衝動的である。また幼児の他者の働きかけに対する反応は、最初は全く受動的な受容であるようにみえる。しかし、そこには既に能動的・積極的な参加の芽生えがあり、共同（行為）への情熱が含まれている。幼児は、「最初の一呼吸、最初の泣き声から、人々の注目と要求にさらされる」(45)。例えば、幼児は「本能的な言葉」を発する。そして、人々は、それに対して一定の仕方で「反応する」(46)。幼児の未熟で未組織の活動力が秘めている驚くべき可能性――これについては、既に述べた通りである——もさることながら、周囲の人々の示すこの注目と要求、特にそれが含んでいる一定の構造こそ、背理を解く鍵、未熟な活動力の共同的行為への参加を実現する注目させるべき過程の核心、習慣習得の全過程の創造的発端である。この周囲の人々の反応の特徴をなすものは、それが、あたかも幼児の動作に共同への意図があるかのように見せして、為されることである。人々の幼児への反応は、この点で明らかに、単なる事物に対するものとは勿論、動物に対する反応とも異なっている。人々は、最初から、幼児の側にそのための準備のあるなしに拘らず、彼を一定の共同的行為の分担者または成員と看做して、彼に対して共同的行為の形式を履んで――即ち、幼児の動作、つまり幼児に割り当てられた（と看做される）部分的行為と対を為し、それと補完し合って一全体なる当の共同的行為を構成するに至るようだ、一定の役割ないし地位を占った部分的行為をそれぞれ分担するという形式を履んで――反応している。幼児は、初めから共同的行為の分担者に擬させられ、そこにおいて一定の役割を担って行為することを要求されている。人々は、その反応において、既に幼児を全く受動的であるような存在とは見ていない。幼児を囲む人々の行為は、このような性格ないし機構を、根本的に含んでいる。幼児の誕生、それは、新しい成員の誕生と参加であって、誕生という出来事それ自体が、その瞬間に、周囲の共同生活の成員の行為に衝撃を与え、それを変革し、それにこのような新しい性格を附加するのである。幼児の側では、人々のこの反応――具体的に言えば、人々が彼を取り扱うその仕方――を、最初は全く受動的に受けとる。彼は、そのように取り扱われるままになる。しかし、幼児の側のこの受動的な受容の動作も、周囲の人々が彼を包んで形づくるところの共同的行為の一定の状況の中へと吸収されて、直ちに能動的・意図的な性格を持つもの、一定の役割を担うものとして位置

(45) ibid., p. 55
づけられ、新しい反応と取扱いを誘う。人々は、幼児が同意した、喜んでいる、怒っている、当惑している等々と理解する。そして、その理解は新しい取扱いへとつながる。そうした状況の中では、幼児の個々の行動は、ただそれをただ、他のものから切り離されて注目され取られることはない。それは、常に他の行動と結びつけられ、ひと続きの行為を成すものとして理解される。その理解は、直ちに一定の具体的な（彼に対する）取り扱いとなって現われる。そうした理解と取り扱いを通して、その絶えずの繰り返しを通して、幼児は、周囲の人々と反応し合い、働きかけ合い、行為し合うことを学ぶ。それは、自らの断片的な諸々の動作を連続したもの、一連の行為を成すものとして、また他の人々の行為と照応し関係し合うもののとして受け取り、理解することである。断片的な諸々の動作に連続性または組織を与えるもの、またはその連続性や組織が表示するもの——それは、それらの動作が、その構成成分を成すところの行為の意図である。この行為の意図は、更にまた、それぞれ、当の行為者を囲む人々の共同的行為とその意図つまり共通の目的と結びついており、それを一定の仕方でいわば転換・変形したものである。かくして、幼児は、自らの動作及び行為が「何を意味するかを知るようになる」。(47) それはまた、彼の行為がその一構成部分を成すところの共同的行為の共通の目的に気づくことでもある。幼児は、共同的行為の共通の目的に関心を持つようになり、自己的動作や行為も他者の反応もともに、それを「準備する出来事」、その「信号」(48) と見るようになる。この段階に達すれば、彼の行為は明白に自発的なものとなり、参加・協同的性格を極めて明瞭な仕方で帯びたものとなる。

習帯つまり活動（力）の組織・機能とは、この場合、幼児の活動的断片的表現ある個々の動作に与えられる連続性、動作がその構成成分として適切に位置づけられるところの行為の内部的な組織ないし機構を意味する。それはまた、成員個々人の行為を、共同的行為の一定の構成成分として適切に位置づけるところの（共同行為の）組織・機構と連続してい、それと表裏の関係を有するものでもある。こうした連続性または機構が、ただ幼児が共同生活の枠内に引き入れられ、彼の動作と行為が常に共同行為の中に編み込まれることによってのみ形成されるものであることは、上述の分析から明らかである。結局、共同的行為への参加について言えば、彼は参加するようになるのではない。彼は最初は孤立していて、後になって初めて共同的行為に参加するのではない。彼は初めから、既にそれに参加している——否、参加させられている。彼はただ、積極的に参加するようになるだけである。積極的に、即ち自らが共同行為の一員であることおよびそこにおける自らの役割を知って、自発的・意識的に自らに割当てられた行為を成し遂げるようになるだけである。また、共同行為における習慣の習得について言えば、幼児は、習慣を習得するのではない。彼は、初めは習慣を持たず、ただ衝動のままに孤

(47) ibid., p.84
(48) Experience and Nature, p.177
立していて後になって初めて習慣を習得するのではない。共同的行為においては、彼は、最初から既に習慣を有する者である——否、習慣を有する者と看做され、そのように取り扱われている。後になって、彼は、ただ、自らの動作と行為が含んでいた——とされる——習慣に気づき、それを今度は図意的に調整するようになるだけである。誕生以来、それと気づかずに——共同的行為に参加することの中で——既に進行していた習慣の形成が、後になって、ただ意識され、改めて確認あるいは修正されて、一層深く定着するようになるだけなのである。

まさにかくして、共同的行為への参加と習慣の習得が為される。活動力の習慣化、習慣の習得または形成の進行は、人々との共同行為の一層の拡大と緊密化の結果であるとともに、またその条件ともなる。人は、行為の組織を全く欠如したまま生れて来るが、その代わりに彼は、必ず何らかの集団生活と共同的行為の枠内に生れ落ちて、その組織によって生存していくのである。

形成され習得された習慣の特徴ないし構造については、この習慣（的行為）の考察の初めの部分で、その主要な点を既に指摘しておいた。そこで指摘された習慣の特徴が、その後の考察と叙述の中で矛盾のないものとして、更に積極的には、それによって支持証明されるものとし、確認されさえすればよいのである。ただ、ここで注目すべきことは、習慣の知性（または精神）との連続性である。

前述したように、習慣の習得とは、無組織の活動力が突然行為の組織を附加することではないて、共同的行為に組み込まれることによって、その意図も意識もないままにすでに進行していた活動力の習慣化に気づき、それを改めて確認し、また強化・修正を施して一層深く定着・機能せしめるようにすることである。共同的行為の中で、活動力に組織を与える過程——つまり活動力の習慣化の過程——を導くものは、成長個々人の一定の意図と集団の共通の目的である。習慣の習得即も習慣の意識的確立に先行するところの、しかし事実上は既に進行している活動力の習慣化の過程は——その意識の有無に拘らず——一定の意図に導かれており、それを含んでいる。また、習慣の意識的確立は、既に存在しているそのような意図に気づくことを前提とする。そして、それに対して、知性——それは活動力ないし行為が帯びる一定の性質であるが——を最もよく特徴づけるものは、後に詳細するように、行為の意図に気づき、それを理解し、それに自らの一定の意図をもって反応することである。知性とは、習慣（的行為）が更に新しく帯びるに至るような一定の性質である。知性とは、知的な習慣のことである。だから、習慣は、その形成・習得の過程、特にその端緒にあっては、知的である。形成・習得されつつある、柔軟で、他者の行為の意図を理解してそれに反応する一方、自らの行為の意図を意識しつつ為されるような習慣的行為は、極めて知的である。そのような習慣的組織は、知性そのものである。しかしこ、形成され確立され終った習慣の組織は、硬化しはじめめる。それは、自動的・無意識的に機能しえるものとなり、知的であることを必要としなくなり、かくして知
性を排除し封じ込むようになる。

前述した如く、動物は自らが諸々の感情を持っていることを知らないし、そうした感情を伴う活動を自らがますます為していることに気づかない。ところで、或る事物を知るということ——或る事物が存在していることを知るということは、まさにこのことを前提するが——は、その事物が包含または担っている他の事物との間の諸関係、つまりその事物の生起における諸条件とそれが惹き起す諸結果を知り、それらに気づくということを意味する。同様に、或る一定の感情をただ単に感じ且つ所有するだけではなく、自らがその感情を抱いていることを、従ってその感情を、知るということは、その感情またはその感情を伴った活動の諸条件と諸結果を知るということであり、——事物の可能な諸条件・諸結果こそその事物の意味を成すものなのであるから——その感情の「意味に気づく」is aware of meanings(49)ことである。そして、そのことは、感情を伴った活動を現実に為す以前に、その諸々の条件・結果を知ることであって、いわば内的な想像の世界の形成を前提とする。内的な世界の形成とは、即ち、内的に働く活動力が外的な顕在的な活動の形をとる機能を失われて活動力から分化し独立することであり、そのためには何よりもまず初めに、活動力を絶え間なく完全な仕方で顕在的な活動へと現実化せしめるところの活動の本能的組織が機能を失い、新しい活動の組織、即ち、内的な想像の世界の存在を許さばかりでなく更にそれを前提とし、そこにおける感情と活動の劇的予行・試演dramatic rehearsalによって条件づけられ、導かれて成立するような活動の組織にとって代わられるることを意味する。存在の新しい発展段階、精神的存在においてこのような新しい活動の組織を与えるものこそ、習慣habitである。内的に機能する活動力が外的・顕在的に機能する活動力から分化・独立し、それによって、内的な想像の世界の形成が可能となるということだけでは、しかし、活動する有機体はその活動が伴っている感情を知るようには、まだならない。そうなるためには、その内的な世界の中で、その感情が他の諸々の感情から「識別され、まさにそのものと認識され」結局「対象化され」 discriminated, identified and objectified(50)なければならない。諸々の感情を、そしてそればかりではなくて、内的な想像の中で機能する活動力の諸要素をも、それぞれ確認・識別・対象化するもの——それは、それらのものに与えられる名称である。言葉によって、それらを表現することである。名づけられることによって、それらは、直接に感じられ所有されることを離れて、その（それらがそれぞれ結びついた諸々の活動の）諸結果を代表するもの、その「指標」または「信号」(indication or sign)(51)となる。そして、名づけること、言語の使用は、更にこの新しい存在の段階における個体の間の相互作用の関係とそれら個体の集合が生ずることになる新しい一定の性質・特徴——即ち、行為の共

(49) ibid., p. 258
(50) ibid., pp. 258~259
(51) ibid., p. 258
同または行為への参加と生活共同体を前提とする。しかしながら、ひらがえて考えてみると、参加という仕方の行為、共同行為、およびそうした行為がそこで為されるところの精神的存在の集合、共同体、社会、それ自体、その成員つまり精神的存在の諸個体の行為の習慣的、そしてまた終には精神的・知的な組織化を前提とする——否、前提とするというよりは、それと同時に成立し、現われ出る。

IV

ここでは、その個々の成員の活動力が習慣的組織を獲得し、更にそれが知的・精神的な組織へと高まっていく際に不可欠の条件を成すものとしての、人々の集団における共同的行為の特徴ないし構造が、そうした精神的知的行為の形成にかかわるを持つ限りにおいて考察される。

物理一化学的存在、無生の物事や心的一物的存在、生物がすべて、それぞれ個体としての個有の性質を一つ一方、またそれらの間に常に何らかの相互作用を有する如く、精神的存在もまた、個体、即ち個人として「直接的独自性」immediate uniquenessを示すとともに、諸個人相互の間に常に何らかの「関係」connection, relationshipを抱っている。ここで注目されなければならないのは、従って、人は何故孤立していないで、諸々の関係を取り結ば、ということではなくて、人が互の間に有する関係、人々の相互作用が生ずるところの特徴ないし構造、「人々の共同の特有な型distinctive patterns of human associationから流れ出る諸結果」(53) である。

「事物の集合は、これまで秘められていた動力を解き放つことによって、その集合、それ自体とその構成諸要素に新しい性質を賦与する」(54) が、精神的存在の段階に個有の集合もまた、その成員の行為に新しい個有の性質を与える。成員の動作・行為はすべて、単に相互に時間的に前後して生起しただけ、または同時に共在しているだけのもではなく、「参加・協同」participation(55) となる。即ち、それらはすべて、「共同の包括的事業に参加する」ものまた是「協（共）同の行為」cooperative behavior(56) の性質を帯びる。そこで、次に、人間の集合、共同体の中で初めて可能となるところの共同的に為される行為の特徴・構造が問題となる。そして、そうした行為の経験的分析に基づいた記述を、われわれは既に本論文において幾度か試みていた。「第三章 教育的諸問題の哲学的批評」(V) におけるAとBの二人の間で為される交信の分析や本章の(III) における幼児の共同的行為への参加と習慣の習得に関する事例の分析等がそれである。それらは、ここでも参照されるものである。それ故、ここでは、新たな事例による分析を付加することは省いて、既述の分析を考慮に入れつつ、そこに見出される共同的

(52) ibid., p. 175
(53) ibid., p. 175
(54) ibid., p. 175
(55) ibid., p. 175
(56) ibid., p. 179
行為の個有の構造を指摘するだけに止める。

共同的行為の根本的特徴は、勿論それが共通的に為されるということである。共通的または共同的な仕方でいうことが、その特徴なのである。ところでお、行為の共同または共同の仕方を可能とし、欄立たせるもの——それは、その共同的行为の成長による行為の意図または目的の共有である。そこで、次に、行為の意図または目的の共有の具体的な在り方、構造が問題となる。行為の意図または目的とは、説明すれば、共実証するというわれた行為の結果である。人は、一定の行為を為すに先立って、それがもたらす諸結果を予測し、その中のあるものを望ましいものとして選択し、それを目的に当の行為を為す。この選択され目ざされることになった行為の予測された結果こそ、目的または意図である。共同的行為もまた意図・目的を持つ。共同的行為の目的・意図は、その成員が共有または分有する。それは、「分ち合わせた結果」a common, shared consequence(57)として存在する。そして、共同的行為の目的または意図の共有は、具体的に考えると、各成員、当の行為——一連の諸過程を含む全体としての行為——の終局的結果を予測し、改めてその実現を望むこと、そしてその望ましい可能な終局的結果の実現に至るまでに、各成員が分担すべき部分的行為を思い描き、その想像的に描き出された行為の全体像の中に自らの担うべき部分的行為を位置づけて理解すること、を含んでいる。共同的行為の目的・意図の共有は、それ故、それの形成と形成されたものの確認または共有を統合して包含する一過程である。この共有の過程が一挙に一瞬の間に完結するものでないことは、勿論である。共有の成立に至るまでの成員の間の協調的・準備的接近・交信が、勿論存在する。その中で、共同・共通の意図または目的が次第に明白なものとなり、その共有が順々に具体的内容と手順を具えたものとなるに至る。そして更に、一定の行為の意図または目的の共有に向うこのような過程が一体如何なる条件の下で始まるかということを改めて問う時、人は、こうした共同的行為を包んで広がる更に広い一定の共同生活ないし共体の存在に突き当たる。根底を成すその共同生活の中から人は具体的な一定の、勿論共同の問題を与えられて、それを取り扱う共同的行為へ、その目的・意図の形成と共有へと立ち上がるのである。人が一定の目的を共有し、一定の行為を共通で為し得るのには、彼らが既に何物かを——即ち一定の同一の共同体の成員であるということを——共有しているからなのである。（共同体の）成員であること、成員となることこそ、すべての共同的行为の根源である。

ところでお、この共同的行為の目的の共有の過程の特徴を成すもの、それは、各成員が、共同的行為の過程で生ずる断片的（部分的な）出来事——例えば、一成員の特有な動作やそれと結びついた或る事物の動き——に直接反応するような仕方で、自らの為すべき行為を想定するのではなくて、その行為にかかわる全成員とそこで取り扱われる全ての事物を含んだその場の状況全

(57) ibid., p. 185
体を構想し考慮し、この状況全体の立ち場から、自らを含めて全員のすべての部分的行為や動作とそれにかかわる全物事の立ち場を理解し評価することなど、ある。各成員が、その時「状況の立ち場に身を置く」[(58)] のである。人をこうした行為は、例えば、鳴りの反射的動作、即ち、「農夫の持つ容器の中で穀粒が鳴るのを聞くとその周りに走り寄り、彼が穀粒を投げ与えようとして脅を振り上げると逃げ散り、その動作が終ると再び寄り集まって来る」というような「自己中心的な」単なる反射的反応[(59)] とは、根本的に異っている。共同的行為の中では、人は、個々の出来事を後に来る他の出来事を即ち共同的行為の目的の実現そのものの——を準備するもの、その「信条」 sign[(60)] として理解し取り扱う。理解されたこの共同的行為の目的・意図こそ、各成員として、その実現に寄与するのはその各々の部分的行為へと立たしめるところのもの、成員のそうした行為の「誘因または刺激」 occasion and stimulus[(61)] である。

言葉が発生する、というよりむしろ音声や身振りが言葉に変わる、またはそれらが言葉の機能を付加して帯びるに至るのは、まさにこのような特有の構造を有する共同的行為の中でにおいてである。音声や身振りは、それ自体としては単なる有機体の活動力の偶然的な「戦略的または副産物」[(62)] であって、表現や伝達の性質・機能を持つものではない。「赤ん坊の泣き声」は意図を持たず白発され、人の不用意な「態度や表情の変化」は彼の本心を暴露する。また、「声の届かない遠方で手を振る人」の意図は、こちらにいる人々によって極めて多様に理解される[(63)]。そうした動作の当事者を含む周囲の人々の間で、相互の関係の共同的な枠組または脈絡が明白に確立され理解されるようになるに従って、それらの動作が意図を持ちその、何事かを表現するもの、いわば意味あるものとなる。それは、言葉の機能を付加して帯びるに至る。ただ「相互援助と相互指導の文脈 a context of mutual assistance and direction の中で用いられる時にのみ」、また「その使用が真に行為の共同 a genuine community of action を成り立たせる時」にのみ [(64)]、それは言葉となる。動物においても、ある個体の一定の動作が他の諸個体に対する刺激となって、それに一定の活動や反応を惹き起す場合がある。堂の灯、家の火、雉の鳴き声、孔雀の羽根、更には高等な動物の群に見られる微妙な各種の連携動作がそれであって、それらは「信号反射」「信号的行動」 signaling reflex or act[(65)] と呼ばれる。しかし、それらが言葉となる音声や身振りと決定的に異なる点は、それが他の個体によって後に生ずる或る事物を表示するものとして反応されるのではなくて、単に「直接的刺激」として「或

(58) ibid., p. 178
(59) ibid., p. 177
(60) ibid., p. 177
(61) ibid., p. 179
(62) ibid., p. 175
(63) ibid., p. 177, Democracy and Education, p. 32
(64) Experience and Nature, p. 176, 185
(65) ibid., p. 176, 177
る形成された機構」によって、いわば本能的な仕方で反応されること(66)にある。人間の場合はそうではない。AがBに対して花を指す時、Bは先ずAが起こした動作に惹かれ、それに注目するが、Aの動作そのものに直接反応しない。BはAの動作が何を表示するものであるかに注意を移す。つまりBはAの動作を指示する動作と理解し、その指示に対して反応する。しかしBはAの指示の動作にもまだ直接反応しない。それが何を指示するか、それが信号となって指示するところのもの、花へと更に注意を向ける。Bの注意は更に、その花がAに対して持つ関係へと移され、この関係の実現のために自ら為すべきことを確定し、これを果たすために立ち上がる。即ち、BはAの動作の意図を自らもそれに参加すべき——参加しよう——共同の行為の意図として、その意図に反応する。赤ん坊の泣き声に反応する母親、何気なしの表情に当人の真意を一瞬読み取る周囲の人、遠方で手を振る人に応えようとこちらの人々の場合も、この根本的構造は決して変わらない。共同的行為または行為への相互参加の形成という仕方で音声や身体運動に反応すること、これこそ、人の行為に特有のものであり、かくして形成される共同行為の枠組みの中で初めて、音声や身体運動は言葉となる。書かれた文字つまり文章を読む場合も事情は同じである。この場合には、著者と読者の共同的行為の関係がただ「間接的」という(67)になるだけである。

言葉の機能を帯びるに至った音声や身体運動において注目すべき特徴は、それがそれによって指示された事実の「意味」meaningを表示しその記号となるということである。言語の核心は、「交信」即ち「幾人かの仲間によって為される或る行為において、各人の行為が協同ということによって修正され規制されるような協同的関係を確立することにある」(68)。そして、言葉は、この機能を、それによって指示された事実に対する「行為的方法」即ち「その事実を、共有された行為の完成に対する手段として用いる仕方」(69)を表示することによって、果をする。交信、共同的行為において、音声や身体運動がその行為の脈絡と関連を持ちつつ有効な仕方で発せられ為される時、それは単なる活動力の氾濫ではならない。それは一定の付加的機能を持つ、それは或る事実を指示する、更にそれは単に或る事実を指示するのみではない、それは、その事実を他でもない或る一定の仕方で取り扱うように、その仕方を指示する。その事実が一定の共同的な仕方で取り扱われ反応されるように、その仕方を指示する。即ち、一定の共同的行為において或る事実が言葉——音声・身体運動——によって指示される時、それを指示する言葉は、その事実をこの共同的行為の共通の目的の成就のために用いるべき一定の仕方を表示する。そして、事実のこの一定の用い方、それがその事実の意味である。意味とは、「事実を行使し享受する共

(66) ibid., p. 177
(68) Experience and Nature, p. 179
(69) ibid., p. 187
同的な方法」 a concerted or combined method（70）である。そして、この場合、事実の取り扱い方とは、その事実がこの共同行為に入り込む他の諸事実および成員との間に既に有するところの諸関係の認識に基づいた取り扱いを意味する。事実の意味、即ちその一定の取り扱い方は、その事実が元来自然の中で有するこうした関係を一わば実現する方法であって、この点で、事実の意味はその事実の「可能な相互作用」「可能な諸結果」possible interaction or potential consequences（71）のことである、と言うことができる。それはまた、事実が元来担っている「自然の相互作用または関係」が存在の新しい発展段階をもたらす人間の共同的行為の中でとるに至る新しい形態（72）である、と言うこともできる。花を指示するAの身振りまたは彼の音声「花」は、AとB二人の間に現に存在する花を指示するが、その指示は、花が二人の共同的行為の文脈において担うところの諸関係、即ち（1）共有された目的に対する、（2）Aおよび（3）Bに対する関係を表示する。花は「持ち運びが可能」ものであり、受けとられ所有されるものである。ここでは、現存する花は、そうした意味を持ち、それを見指示する言葉、音声や身振りは、花のその意味を表示する。そうした意味を表示する限りにおいて、音声や身振りは言葉なのである。

ところで更に、共同的行為へと取り込まれた事実が何故意味を帯びたものとなるか、事実が担う諸関係が何故意味という形を取るに至るか——要するに事実に意味を付与するもの、その意味の源泉が問題となる。事実が共同的行為へと取り込まれることによってその諸関係が新しい性質を付与し、それが意味を帯びるのは、その事実がそこで共同的なる目的・意図と結びつくからである。意図または目的、目的、aim, end-in-view とは、まだ現存していなじ事物、将来生起するであろう事件が、既に現在活き活きとして仕方で機能することである。将来の事件・事物が現在の行為を導き、それに活気を与えることができる。そこでは、現在は、孤立した単なる瞬間的な一時点、反射的なのみ反応される一瞬ではなくて、未来を含み、未来への長い射程を持った方向を帯びるが、一方未来は、単なる無力で空虚な非現実ではなくて、現在へと浸透し、それを一定の仕方で押し動かす生きた力となる。精神的存在に特有のこうした意図ある行為、その意図の内容を成すものこそ、その行為に取り込まれた事物であり、その事物が将来有するに至るであろう諸関係なのである。それ故、意図または目的の内容を成す事物のこの可能な諸結果は、その事物を取り扱う現在の行為の中に生きて働くことになる。事物のこの新しい機能、即ち行為の意図の内容を構成することによって、現在にされるその行為の中で、それらを導くという仕方で新しく機能するに至った事物の将来の可能な諸結果——これがその事物の意味である。だから、事物の意味は、行為の意図と結びつき、その構成部分となることによっ

（70） ibid., p.188
（71） ibid., p.189, 191
（72） ibid., p.185
て，それから分与されるものである。「意味は，第一次的には（共同的）行為の性質」であり，その「意図」である。そして第二次的に，意味は「事物の性質」となる（73）である。

言葉はかくして事物の意味を表示する。しかし，ある一定の事物を指示する言葉の意味は唯一ではない。共同的行為を成立させる当該事物の多様な用い方に応じて，それを指示する言葉は多様な意味を受け取る。一般にある言葉の意味の全部は，その言葉がそれを構成成分として含むところの言語の中に，即ち言語が包含する「関連づけられた意味の集合体」の中にその一員として位置づけられる（74）に，初めて完全な仕方で定まる。言葉はそこで定められる意味を持ち，しかもそれだけしか持たない。こうした意味の体系とそれを包含し表示する言語とは，「慣習・気風・精神」（75）を同じくする人々の共同体の中で，その共同生活を基盤として形成される。個々の言葉の個々の意味が，現実には一定特殊な共同的行為の中でそれを成り立たせる仕方で決定されながら，しかしそれらの意味相互の間で「つじつまが合う」（76）の，まさにその共同的行為の基盤として人々のそのような生活と行為の共通の形式が存在しているからであり，また共同的行為がそうした基盤を成す共同体の生活様式の一定の仕方における実現であるからである。同じ根拠からも，言葉の意味の客観的価格，即ち一定の共同行為の中では誰もが同一の仕方でその言葉の意味を理解することも，説明される。言葉が表示する意味とは，まさに当の事物が現存することにおいて既に含んでいるところの他の諸事物との諸関係を，同一の共同体の諸成員が共同的に知覚し行使する方法なのである。

現存する事物が他の現存する事物を指示しその「信号」signalとなる——例えば，煙が見えて，それが火の存在を予兆し，黒雲が現れてやがて来る嵐を知らせる如き——ことに代って，言葉が事物を指示しその「記号」signとなる時（77），そこに画期的変化が生ずる。雪や黒雲等現存する事物の予兆し指示する機能はそれがまさに現存する間だけに限られるが，言葉，「煙」「黒雲」という記号は，それが表現する事物が現存しなくとも，その意味を「保存し」「記録し」待ち運ぶ。記録するのみならず，それは，言語，意味の体系の中で，事物の具体的な存否から独立して，即ち想像的に他の（事物を表示する言葉の）意味と広汎な関係を取り結ぶ。言葉「煙」は，煙の存否を離れて「火」のみならず，「摩摟」「酸素」「熱力学」の等の言葉と結びつく。かくして，意味を表示する言腋は，言語に現存された意味の体系に従って，それが指示する事物の現実の存否を離れて「想像的に管理・操作・実験されるる」（78）ものとなる。言葉の物的素材

(73) ibid., p. 179, 180
(74) Logic, p. 49
(75) ibid., p. 50
(76) ibid., p. 50
(77) ibid., p. 51
(78) ibid., p. 52
(79) Experience and Nature, p. 194
を成す音声や文字の「中性的」indifferent and neutral な性格が、この言葉の操作可能性を更に助長する。言葉と言葉の、現存する事物の操作を離れた、それらの意味における関係の認識が「観念」idea であり、そうした言葉一意味の想像的実操作によって、現存する事物を取り扱う現実的行為の世界とは異なる新しい世界、観念の世界が現われる。観念はあくまで観念つまり「仮説」hypothesis であって、観念の想像的な構成は、それ自体ではまだ現存する事物の在り方を何ら変更するものではない。観念の指示する仕方に従って為される顕在的な行為が、初めて観念を現存する事物の一定の取り扱い方として現実化し、その終局的内容を確定する。そうではあるにしても、豊かな意味の世界的な形成と観念における意識は、現存する事物の世界にかかわる顕在的行為に決定的影響を与える。その影響の中で最も重要な意味を持つのが、意味の世界的な表現によって想像において行為とその諸結果の「試演が可能となる」ことをである。顕在的行為は、現存する諸事物と環境を取り扱うのつかない仕方で変更するが、言葉、意味または観念の操作による、行為とその諸結果の想像的試行は、現存する事物に触ることなく為される。それは繰り返し利く。かくして、顕在的行為に先立って為される当の行為の想像的試行は、その行為の存する広い意味の脈絡を明らかにすることによって、現実に為される顕在的行為を意味に充ちた知的なものとする。言葉の出現は、人の行為に決定的な変化をもたらす。

V

感情は、行為——即ち、有機体とその環境の諸条件つまり有機体外の諸事物との「相互作用」、つまり相互に作用し合うそれら両方の要素を併せ含むところの一個の全体としての「状況」——の「性質」の なる感情は、言葉をはらって名ざされることによって、ただ単にその時その場で直接に所有され感じられるだけのものから、相互に識別され、まさにそのものとして確認され、対象化されるに至り、かくしてその感情をその性質として帯びた行為の「諸結果を示す信号」となり、性質において異った感情は「客観的差異を表わすもの」となる。そして、行為の感情が知覚され、行為の諸結果を示すものとなる時、行為は精神的・知的性格を帯びたものとなる。以下、この過程を考察してみる。

言葉をはって行為が帯びる感情（の性質）が名ざされない限り、行為の当事者は、行為そのものに完全に取り込まれて、自分がそうして埋没している状況の性質を、ただ直接に、あるがままに感じする以外に為す術を持たない。彼は、捲き込まれた状況の動きにただ翻弄されて、徒
に反射的に諸々の反応や動作を繰り返すだけである。

これに対して，言葉を以って行為の状況が帯びる性質，感情を名指すことが如何に決定的な変化をもたらすか，そのことが含む意味内容は，ここに三点にまとめ示すことができる。

まず最初に，事物を名指すことが一般に含むところの一つの注目すべき意味内容は，それが名指される事物のかかわりの，換言すればその事物を含んだ行為の一定の状況へのかかわり，否定的という既に進行している事態の，中断であるということである。事物に名付けることは，その事物に対して既に為しつつあるところの行為——動作または単なる反応——を中止すること，その事物と自らが一体となって作用し合って形成している当の相互作用の状況をその諸要素に解体して，その事物から自己自身を引き離し，この離れた位置からその事物を読めること，である。それは行為への没頭からわれわれに帰すること，否なら取り戻すこと，である。それとは，事物を対象の地位に据えることであると同時に，自己自身を目的的能動的行為する主体の地位に立ちさせるべく立ち上がることである。一般に，事物を言葉で以って指示することは，行為者の態度または意識においてこのような根本的な方向転換を含んでいる。単なる事物ではなくて，諸々の事物をその構成要素として含む一全体をなせる行為の状況を，それが帯びる性質，感情を以って名指す場合も，事態は根拠的につれと同じである。それは，既に進行しているところの行為の状況への多くの没頭・埋没から自己自身を引き離すこと，行為の状況というこの一全体を成すものそれ自体を対象化し，それに対して自らに主体の地位を確立・確保せんとすることである。行為の状況を対象化する際に意識がとるところの構造については，第三の項で考察する。

さて第二に，事物を名指すことが一般に含むところの意味内容として次に注目すべきことは，それが事物に二重の意味を付与し帰属させること，である。事物に名称を与えることは，言語，かもそれぞれの意味を表示する信号——言葉——の系を背景として，事物を一定の言葉で指示することである。それは，事物を，それを名指し表示することとなった言葉，事物の名称を媒介として，いわば「信号の体系の中に取り込む」take up into a system of signs（85）ことである。それ故，事物を名指すことは次の二つの事柄を意味する。即ち，第一に，それは，その事物を，一定の個有の性質を具えたものとして，他の事物から区別し確認することである。その事物の直接的諸性質——それは，直接に感じとられるもの，そうされるより他にそれを取り扱い，それに反応する術のないものである。そうした諸性質が，言葉，名称によって識別・確認されて，その事物を直接に特徴づけるものの，その事物の「直接的で内在的な意味immediate and immanent meaning, sense（86）となる。結局，名指すことは，先ず以って事物の直接的意味を識別・確認することである。そして，与えられた名称は，事物のこの直接的意味を先ず表示

（85）ibid., p. 259
（86）ibid., p. 261
するものとなる。

事物に名を与えることは、更に、言語、即ち、個々の事物（の直接的意味または個有の諸性質）をそれぞれ表示する諸々の名称まは言葉、信号の——それらが表示する直接的意味の関係に応じて形成された——体系の中に、当の事物の名称の位置を定めること、である。かくして定位されると、当の名称が関連を持つ他の諸々の名称が明らかになる。この時、関連ある他

の諸名称がそれぞれ表示する性質または直接的意味、それが当該事物の名称の表示するところの——直接的意味とは異った——第二の意味、「信号または指標」sign or index としての意味

signification(87) である。事物は名付けられる時、この第二の意味も付与される。この第二の

意味は、事物が他の事物との間に担っていることが——一定の顕在的行為による操作を以って

——確認されるところの諸関係、その事物の可能的諸関係を示す。それはまたその事物を操

作する方法を示すものである。事物の名称が他の名称との間に、そのそれぞれが表示する第一

の直接的意味の関係の故に担うに至るところの関連は、意味の全体系の及ぶ限りで、潜在的・

可能的では広大なものであるが、その広がりの中で目下気づかれていない範囲の遙関のみが、その

名称に、延いてはその事物を帰属させられる。事物（の名称）が担うところのこの気づかれる

った意味の関係、それがその事物の観念である。観念とは「意味の実現された理解」actualized

apprehensions of meaning(88) である。結局、事物を名すことは、その事物に上述した如き二

つの意味を帰属せしめること、即ち、そうした二重の意味を持つものとして、その意味に従っ

て人がその事物に反応し、それを操作することを可能とすることである。名付けることが含む

こうした意味内容は、単なる事物ではなくて、諸々の事物をその構成要素として包括している

一全体としての行為の状況を、その性質、感情によって特徴づけ名指す場合においても、根本

的に変ることはない。ただこの場合には、上述のような二重の意味の帰属に加えて、更に、行

為の状況という、諸々の構成要素から成る一全体の対象化の過程または構造の考察が挿入され

なければならない。

従って、第三に、行為の状況を対象化するところの一定の意識の過程または構造を、行為の

状況に名づけるということは、更に含んでいるわけである。既に最初の項目で考察した如く、

行為の状況への命名は、その状況そのものを対象化する試みである。それは、その状況のまま

に状況としての進行、自らをも包括する一全体としての状況としての進行を中断させ、自らをその

中から脱脚させる一方、これまでかかわって来た環境の諸事物をそのままへ押しやること、かく

して行為の状況を解体することを意味する。しかしながら、第二の項目で考察したように、行為
の状況をその性質、感情によって名指することは、その状況に二重の意味を帰せしめ、かくして
その状況を操作されるものとすることでもある。この両者の考察によれば、結局、行為の状

(87) ibid., p. 261
(88) ibid., p. 303
況に名づけることは、その状況を停止・解体せしめつつ、しかもそれに二重の意味を帰属することを意味することになる。ところが、解体された、また解体され行く状況は、二重の意味を受け取り担うことができない。実際、それが名付けられる時、それによって新しい二重の意味を付加し受け取るのは、状況それ自体ではない。それを受け取るのは、何か。これが、ここででの問題である。

改めて反省してみると、行為の状況の命名を契機とした対象化、即ちその解体は、決して単なる解体、その諸要素の単なる消極的な分散、無関係化ではない。行為の状況の解体は、もって積極的なもの、一定の方向を含んだ動きである。むしろ、行為の状況そのものの中でこそ、そこに取り込まれ、それに没頭している行為の当事者の知覚・意識は、機能を停止し、状況全体の中に散乱し、焦点と秩序を持っている。状況の進行の停止と解体は、だからこそ、そこに痛さき込まれている行為の当事者が自らの散乱した焦点を持たない知覚・意識をいわば取りまとめて、秩序づけ、かくしてその状況の要素を成す一定の事体へと焦点化させる過程とちょうど表裏の関係にある。両方の過程は、同一の過程の二面である。状況の解体の過程の完了は、従って行為の知覚・意識の統合と状況内にこれまで組み込まれて来た一定の事体への焦点化を意味する。解体され行く状況、そして解体された後にその状況を代表するものの、それは、行為者の知覚・意識の焦点を成すに至ったこの事体である。そして、この事体こそ、当の行為の状況がその性質、感情を以って名付けられる時に、その名称とともに、またそれに伴って帰属せしめられるはずの二重の意味を受け取るところのもの、である。この事体はまた、これまで進行していた行為の状況の中で、その性質を決定するような核心を成す地位にあったものでもある。行為の状況をその性質によって名づけることは、実は、より具体化して見る時、そうした性質を帯びた状況の主たる構成要素として機能していたこの事体を、名づけ、特徴づけること、その事体に前述の二重の意味を帰属せしめることなのである。かくして、状況を支配し代表する事体が名づけられ、(1) その事体が状況内で有する諸性質またはその直接的意味——それは、これまで状況そのものが帯びるものとされていた性質と意味であるが——(2) その事体の一定の可能な諸関係を表すする意味とし観念が気づかれ、その事体が意図を以って操作されるものとなり、かくしてまた停止・解体されていた当の行為の状況そのものも再編成されて、意図された方向に向って進行させられうるものとなる。因に、誤解を避けるために言えば、行為の状況の主要な構成要素を成すこの事体は、行為者つまり有機体の外部の、有機体と一定の相互作用の関係を持つ事体であることもあるし、また、そこにおける行為者の一定の在り方、より具体的には行為者の或る感覚器官の一定の在り方、更には彼の或る自己刺激感覚装置の一定の在り方であることもある。例えば、幼児は、赤い色——それは、彼の視覚器官と彼の外部の或る事体との関の一定の相互作用そのものが帯びる性質であるが——を、常に端的に「或る着物またはおもちゃの属性」 a property of a dress or toy(88) としてのみ受け取る。また、「有
機体と環境との活動的な関係の一定の性質が空腹と名づけられる」と、その名称は、有機体の求める状態ないし在り方、有機体の「求める器官が持つ要求」 an organic demand、しかも「有機体外の求る物事に対する」要求を表示するものとなる。その名称は更に、外部にあるその物事、食物を指示し、食物を獲得・摂取するための一過程を構成する諸物事と有機体との間の諸関係を具体的に明らかにするに至る(90)。更に、現実の行為において、「外的な事件を表示する確実な信号となっていた一定の色は、例えば視覚における或る欠陥を示す信号となる」。この場合には、混乱に陥ったその場の状況の性質——赤に見て、しかしそうでない色——は、行為する有機体の一器官の在り方へと帰属され、それが状況を支配し代表する要素となり、その要素の具体的な工作の方法が指示されることになる(91)。かくて、「行為の状況の性質は、それが名づけられると、その包括的な全体を成す相互作用のその後の進路において手段として機能するような物事が現われ出るのを可能とする」と(92)。

言葉を以って、行為の状況が帯びる性質つまり感情を名指すことが一体如何なる意味内容を含むか——それが、以上の考察によって明らかになった。行為者、有機体（の諸器官）と有機体外の諸物事との相互作用として、それら両者をその構成要素として含む一全体としての状況を成す具体的な現実の行為、それは、その帯びる性質・感情を名づけられることによって、一時中断・停止され、その主要なる構成要素へと分析・解体され、その要素に二重の意味が帰属せしめられ、かくて意識的に構成された意図ある行為となって再生させられる。この再生せしめられた行為、二重の意味を意識して為される、一定の明確な方向——つまり意図——を見えた行為、これこそ、精神的存在・人間の行為にふさわしいものである。かくて、「状況がこのような二重な意味の機能、即ち直接的意味と直接的意味相互の関連を表示する意味 sense and signification との二重の機能を有する時、そこには、明確に、精神あるいは知性が現存している」と(93) ということができる。そして、そうした二重の意味に「気づき awareness or perception, それを「理解すること」 apprehension を、改めて意識と呼び、意識された意味、即ち観念において焦点を持つところの、当の有機体の行為の背景を成して恒常的に機能する「意味の全体系」を「精神」 mind と呼ぶとすれば、(94) 意識的な行為、つまり行為の意味または可能的諸結果を具体的且つ明白に意識し、しかもそれを意図して為される行為こそ、精神の機能を最も鋭く焦点化した形で実現するものであって、精神的存在の行為を最もよく代表するものである。といえることができる。

(89) ibid., p. 260
(90) ibid., pp. 259-260
(91) ibid., p. 259
(92) ibid., p. 259
(93) ibid., p. 261
(94) ibid., p. 303
VI

精神的存在の行為，即ち精神的知的性格を帯びた行為における変化とは，具体的に何を意味するか，またそうした行為における望ましい変化という意味で以って，行為の発達または成長，修正または改造が主張される時，それは具体的に如何なる方向における変化を意味するか——この二点について，ここで考察する。これは，「発達」「成長」または「改造としての教育」の観念，即ち「教育とは連続的経験の改造a constant reorganizing or reconstructing of experience である」95という観念が主張される時，そこに含まれている内容を成すものである。

経験または行為の変化とは，結局その「性質」「価値」の「変形 transformation of the quality, value のことである96。そこで，経験または行為の性質，価値とは何かが問われる。そして，
「経験の（教育的）形式と価値の尺度」となるもの——それは，経験におけるいわゆる「連続性と相互作用という二つの原理」two principles of continuity and interaction97 である。連続性の原理とは，「すべての経験が先行する諸経験から何らかのものを受けとり，後に続く諸経験の性質を何らかの仕方で修正する」98 ことである。また，相互作用の原理は，すべての経験において，「客観的条件」と「内の条件」——「個人的な欲求・欲望・意図およびその他の，経験を今それが待っているようなものとして造り出す諸能力」——との間で，あるいは「個人とその環境を成すもの」つまり「個人と諸事物および他者」との間で，「相互作用」interaction, transaction99 が為されることを言う。

ところで，連続性と相互作用の原理を，経験や行為の価値または意義を問う際の尺度として設定するのは，他でもなくそれが「経験の根本的構造」100 を成すものだからである。そして更に，経験や行為がそうした原理をその根本的構造として持つのは，そもそもそれが習慣的に形成されたものだからである。本能的活動は，後に為される他の本能的活動と連続してそれに影響を与えるようなことはない。それは，それぞれそれ自体で完結し孤立しているものだからである。また，それは，初めに分離して与えられるの外的諸条件と外的諸条件との統合の成就というような形はとららない。それは最初から環境と一体となって，自然の過程の中に組み込まれていて，それが含んでいる諸要素の分化の余地は，全くないからである。一方，本能と異って，習慣は，この二つの原理をその最も一般的な特徴を成すものとして含んでいる。習慣は，行為することによって序々に確立され習得される行為の方法である。また，動物と異って，精神的

(95) Democracy and Education, p. 76
(96) ibid., p. 76
(97) J. Dewey, Experience and Education, 1938, p. 44
(98) ibid., p. 35
(99) ibid., pp. 42～43
(100) ibid., p. 5!
存在には、内外の諸条件は、始めから分裂した形で与えられている。彼は、自らの行為によってその分裂を克服し統合しなければならない。そして、彼は、習得された習慣的な組織を具えた行為によってその統合を実現する。習慣が「それ自身の中に行為のより小さな諸要素の一定の秩序または組織を含む」の学習が、故に誰も習得したのだからである。そして、この場合注意を要するのは、内外両方の諸条件の統合を成就する行為およびそうした行為の中にその方法として顕現する習慣の形成が、決して意のままになるものではないということである。それは、一定の客観的環境の中で、それに含まれている一定の客観的諸条件を現実に行使し操作することによって、そこに一定の変化を惹起し、かくしてそれを行為する有機体の内的諸条件と統合することであって、それにかわる環境の諸条件の客観的な在り方に決定的な仕方で規定される。その成否の鍵は、当然の行為と習慣の形成における環境の諸条件への適確な対応——単なる順応ではなく——にある。

また習慣が持続するものだというのは、ほとんど同義の反復である。しかし、習慣の持続性は、第一に、習慣が行為の仕方・方法であること、しかも第二に、確立・習得された習慣は、単に外的で技術的な、中性的で受動的な行為の手段に止まるものではなくて、それ自体またその所有者をして、自らを実現し機能させるように働き動かして発展する力的な力であるということの、いわば結果の表現に他ならない。習慣は持続する。持続的に機能する習慣は、相互に作用し合い流し合って、各人に個有の複雑な一体系、即ち性格を形成する。或る行為として顕現するのは、だから単一の或る孤立した習慣では決してない。一定の習慣が相互に流し合った全習慣の体系、性格を背景として、その在り方に規定されつつ、そこに顕現する。一つの行為は、人の性格全体のいわば発動である。行為の成否、適否は、この場合、当の行為の直接の組織としての一定の習慣をその焦点とするところの習慣の体系の一定の機能の仕方如何にかかって来る。そして、行為の成否、適否は、第一に、当の行為の習慣の、延いてはその習慣を焦点としてその時機能したところの習慣全体の一定の体系の、強化または弱化を結果する。そして、習慣の体系、性格のこうした強化・再編は、またその後の行為に顕現するすべての習慣の機能に影響する。さらに、行為の結果は、第二に、環境の諸条件の現実の具体的な変化を惹き起すが、それはまた、その変化した環境の中で為される以後の行為、そしてその行為の習慣、更にはその後の習慣が、新たな習慣の体系、性格に影響を与える。習慣的な行為は、まさにこのような両側の仕方で、性格つまり習慣の力的な相互作用の体系を媒介として連続しているのである。要するに、経験または行為が、相互作用と連続性をその根本的構造として持つということ——従ってまた、この両者を、その意義または価値を評価する尺度として用いることができ、ということは、経験または行為が、習慣の産物であるということの自

(101) Human Nature and Conduct, p. 59
然の結果なのである。

さて次に、考察を、経験・行為の変化に関するものへと進める。経験や行為の変化とは、以上の考察を踏まえれば、それが含む諸構成要素の相互作用と、それが他の経験や行為との間に有する連続性の双方における変化を意味する。ところで、そうした変化の考察において問題となるのは、問題の行為や経験が含むところの、その構成要素の相互作用とそれが他の行為・経験との間に保つ連続的関係の全部または全範囲では、実ではない。一つの経験または行為が含む要素の相互作用と外部の他の経験・行為との連続的関係は、厳密に考えれば、無限の広がりと複雑さを持つ。内部の構成要素の相互作用の無限の広がりと複雑さは、行為・経験に入り込む環境の諸条件がそれぞれの背後に担っている無限の諸関係や行為・経験に際して常に有機体の内蔵器官の一部が何らかの仕方で動員されていること等を考え合わせれば、明白になる。また、経験または行為が他の経験・行為との間に有する連続的関係の幅と連鎖の長さ、その広がりと複雑さは、一つの経験または行為がその内部に上記した変化相互作用の無限の広がりと複雑さを包み込んだり、さまざまな要素相互作用の無限の広がりと複雑さを包み込んだりすること、およびそうした経験・行為の無数のものの間での連続が問題となることを考え合わせれば、これまで自明のことである。だから、経験または行為の一つ一つの相互作用とそれが他の行為・経験との間に保つところの連続的関係の一変化が考察される時には、最初から、そうした相互作用と連続的関係の無限の広がりが全てそのまま問題とされているのではなくない。そこで問題とされるのは、さらに、そうした相互作用と連続的関係の無限の広がりの中で、習慣的な組織または方法の中に組み込まれて、現実にまたは事実上行為者によって操作・行使されているものの全範囲でもない。そこで問題にされているもの、それは、習慣的な組織または方法に組み込まれて、現実にまたは事実上取り扱われているものの範囲の中でもり小さな部分、即ち当の行為または経験を為すに当って意識されている部分である。

かくして、行為または経験の、行為または経験の習慣的組織の、そして最も具体的には、習慣的組織の構成要素の相互作用と習慣的組織相互の連続的関係の意識の問題が、考察の枠組みに入り込んで来る。そして、そうした意識の問題が入り込んで来たからには、明確な仕方で考察を進めるための準備として、ここで習慣と意味、性格と精神との関係を、必要な限りにおいて明らかにしておく必要がある。

習慣も意味もともに、行為の仕方・方法にかかわるもの。習慣は、行為を現実に現る的な仕方で機能せしめている。行為の方法ないし組織であるが、意味は、行為のそのうち同じ仕方・方法の可能的・潜在的な在り方がある。ただ想像の中だけでなく、これの結果を産むために必ず説明されるべきこれは、これの一部の手順という仕方で行為が思い描かれる時、それがその行為の意味である。意味の変化は、現実的行為の一つ一つの変化と密接に関連する。一般に、事物（行為も含めて）の意味が行為の中で、しかも共同的に為される行為の中で、またその中
でのみ、理解され、習得され、修正されていくものであることは、既に述べた。また、事物の意味の変化は、それが意識されて当の事物の観念となり、この観念によってその事物を操作する顕在的行為を導くに至る。顕在的行為をまさに導きつつある観念——それは、習慣、新しく習得・形成され、また修正されつつある習慣に他ならない。意味とは、いわば習慣の想像における反映、想像において機能する習慣であり、習慣とは、現実に顕在的行為において作用している意味である、ということができる。一方、習得されていく多様な習慣の間の相互作用・相互浸透の全体系として顕在的行為の現実の背景を成し、行為を一定の仕方で現に規定しつつ機能するものが性格であるが、それに対して、精神は、行為の可能な方法または組織の表現としての意味の相互作用の全体系である。精神は、想像の中で一定の行為の意味が構成される時、その意味の構成——いわゆる想像上の——作業の背景を成し、その作業を一定の仕方で規定するところのものである。精神もまた、誕生以来、行為、共同的行為の中で次第に形成されていくものである。「精神は、ただ生物学的素養と社会的環境との相互作用の中で形成される信念や欲望や意識の一体系としてのみ理解されうる」とさえ。それは、事物の意味の想像的構成に向かうのを、この構成された意味が明白に意識され、意識された事物の意味の顕在的行為そのもの取扱う顕在的行為を——その方法を示すことによって——導く時、その行為の現実の結果、つまりその存在、適不適によって、その事物の意味の想像的構成作業が強化または修正され、その意味をいわば目下の自らの焦点を成すものとしてその構成にかかわった意味の一体系化される精神の在り方を、結局、強化または再編されることに至る。精神は、いわゆる想像の中で機能する習慣の体系つまり性格、可能的・潜在的に機能する性格であり、性格は、実現された、現実の顕在的行為において機能している精神であるということができる。

さて、以上のような予備的考察を踏まえるならば、経験または行為の変化が考察される場合に問題とされるもの、即ち、行為または経験の構成諸要素の相互作用とその行為または経験が他の行為・経験と取って結びつな関係——結局、当の経験または行為が経験または行為の脈絡全体の中で担う諸関係——のが有する無限の広がりの中で、習慣的組織に組み込まれているために、当の行為・経験を為すに当って現実にまたは実事上行使され操作されているのみならず、更に意識されている部分、それは、その行為または経験の意識された意味、あるいはその観念を含むということができる。その行為または経験が、その内部の取組みなどが経験・行為の脈絡全体の中で担う諸関係という両様の作業で現実に有する諸関係の無限の広がりの全体は、行為の当事者の内なる意味の全体系、即ち観念性に於って全然ない。全然無限の広がりの中で、当の行為・経験を為すに当って習慣的に、現実にまたは実事上行使・操作されている部分、これが行為の当事者の内なる意味の全体系に照応する。しかし、

(102) Human Nature and Conduct, p. ix
それはすべてそのまま意識に上らない。意識された意味は、その中の更に小さな、焦点的の部分を形成する。

意味の意識と意識された意味即ち観念の構造については、基本的には (V) における——行為の状況を名ざすことを以って始まる——精神的・知的行為の特徴の考察において、既に考察した。ここでは、それをより具体化して説明する。意識においては二重の意味が交叉する。事物——行為も含む——の意味の意識においては、意味がそこから浮上して来たところの、行為の状況全体が帯びる諸性質の総体を直接表示するところの意味 sense とその状況を代表する事物がそこで担っているとみられる一定の可能性諸関係を表示する意味 signification の二つである。前者即ち直接的意味とは、事物を包む状況の感覚的諸性質——色・臭・音・触感等——やその事物にとつわれる多様な情緒的諸性質——親しみ・希望・追憶・偏見や嫌悪等——の総体、つまりその事物について行為する人が抱く感情の全体である。また、後者は、そうした事物の直接的意味を、それを表示する言葉、名称を媒介として、想像の中で言葉—意味の体系即ち言語——精神の中に位置づけることによって推理 reasoning したところの、当の事物の可能な諸関係、つまり諸条件・諸結果を表示したものである。人が「本を読む時」103、目下読んでいる本の一定部分の意味関係 signification は、勿論焦点化されて明白に彼の意識に現われているのが、彼は、それのみでなく、これまで読み来た部分の多様な意味の脈絡の記憶やそれに伴う感覚と情緒、更には今後の筋の展開への予感等を——とまどまりの極度に圧縮された、直接的に感じられる或る活き活きとした感情として抱きつつ、今読んでいる部分の意味の理解に当る。後者、即ち広大な背景を成す意味の脈絡とその圧縮された直接的な感情としての現れがなければ、前には単に空虚な論理の形式と化する。この二様の意味が当の事物の意味として交差し融合し合うのは、推理をその核心部分とする事物の意味の想像的、推論 deliberation の過程においてである。想像的な意味操作、熟慮の過程の充分な展開こそ、(1) 直接的意味に圧縮・統合されて現前することになる、背景を成して広がる意味の脈絡——精神の一定部分——の範囲を拡大する一方、また(2) 焦点を成す意味関係を明白且つ適確に秩序立てめるための根本的前提条件である。事物の意味の意識に代って、一全体を成す状況としての行為の意味の意識——観念——も同様の構造をもつ。第一に、人は一定の行為の意味として、想像的にその方法、為さるべき一連の手順または行為の可能な諸条件・諸結果——significance——を思い浮べることができる。そして、それだけでなく、また彼は、その行為のそうした意味関係の想像的、操作つまり熟慮または推理を為すべく、その操作の焦点を成す意味関係を包んで、その背景を成して広がっているところの意味の一体系ないし脈絡の全体を、その行為に伴って直接現前する感情、雰囲気——sense——として、極度に圧縮された形で所有する。それが、その行為を

(103) Experience and Nature, p. 306
単なる機械仕掛の動作へと堕せしめずに、自己自身のかけがえのない行為とするように、彩る。人は、行為の意味関係を想像的に操作しつつ、その行為をここに為すに至らしめたこれまでの自らの生活態度、それとかかわりを持った周囲の諸条件の記憶、今後の見通しと希望等を、或る深い感慨を以って一瞬思い浮べる。決定的な結果を持つと思われる行為の選択など、想像的操作に入り込む意味の範囲は広く、この感慨も深い。人生の歧路に立って自らの将来の針路をまさに決せんとする人、一国民の運命を決すべき政策上の一定の選択を委ねられ強いられた政治家——そこに入り込む意味の広がりとその性質に様々な差はあれ、彼らが抱く観念の構造は同じである。その選択を決断すべき当の行為の意味の重さに、人は奮い立ち、また打ち碎かれる。人が自らの生命を賭して奮い立ち、その選択を決断するような、重い意味に充たれた行為は、確かに存在する。行為の想像的試行、想像的な意味的操作——熟慮、特に主理——が充分な形で展開されればされる程、行為の意味関係は明確となり、そこに現前する直接的意味は重く且つ多彩なものとなり、かくしてその観念は内容に充たしたものとなる。

さて、行為または経験の変化とは、結局その意味の意識または意識された意味、観念の変化である。そして、観念の変化とは、観念の構造における変化であって、既に考察した通り、第一に、行為する人が包含する意味の全体系——精神——の中で、意識の目下の焦点を成すところの、その行為の方法または可能的諸関係（条件・結果）を表示する諸々の意味の諸関係における変化、つまりその諸関係の秩序の適確さと明白さにおける変化を、意味する。それはまた、第二に、その行為の観念に、行為の直接的意味として取り込まれ圧縮されて直接に現前するもののなるところ、その焦点的な意味関係の背景を成して広がる意味の脈絡の範囲における変化、つまりその範囲の広さ・広がりにおける変化を意味する。そしてこの二点ないし三面において、観念の変化を決定し支配するもの——それには、これまた既に考察した通り、熟慮または主理のの過程、即も当の行為の想像的試行、当の行為の意味の想像における操作の十分な展開である。その十分な展開こそ、意味の体系、つまり可能な諸関係の広い展望の中に位置づけられると同時に、極めて具体的で且つ明確な秩序・手段を体現する観念、行為に対して豊かな意味とともに明確な指針を与えることのできる観念の形成を可能とするものである。そして、行為または経験の変化とは、その観念がそれに付与するところのこうした意味の豊かさとその指針の具体性および適確さにおける変化である、と結論することができる。この両面における増強こそまさに行為または経験を以て、その内部的構成諸要素の相互作用の具体的且つ適確な組織化と他の行為または経験への有効性と確実な影響力の所有を、可能にするものである。行為の望ましい変化という意味において、行為の発達・成長または行為の修正・改造ということが主張される時、その主張はまさに、このような具体的な意味内容を含んでいたわけである。

最後に、上述のような意味で行為または経験の改造ないし成長の実現が意義と価値のあるも
のとして——特に、それこそまさに教育であるとして——主張される時、その主張の妥（正）当性は、全く自明のもの普通的なものであると考えられるであろうか。そうではない。デューイは、そうした成長の観念を主張する時、自らの一定の価値的立場を併せて意識し、それを明言している。そうした成長の立場に同意しない見解、それどころかそうした立場に反対する思想が、これまで広く存在してきただし、現在でもまだそれらは支配的な影響力を握っている。そうした現代の全体的な状況においては、一見自明と思われる上述の如き成長の思想は、一定の極めて攻撃的な性格を帯びた価値とそうした価値の実現をめざす立場の宣言である。かくして、われわれはここから、デューイが成長の思想を裏づけたところの彼の哲学者における究極の価値の主張の考察へと入り込むことになる。そしてその考察は、共同生活の望ましい在り方としての「民主主義」(democracy) の思想の検討へとつながる。そして、そうした共同生活・共同的行為の構造を、これまでの分析と考察の成果を踏まえて再び明らかにする時、その構造こそ、そのまま望ましい教育の根本的な構造を示すものとなる、と考えられる。